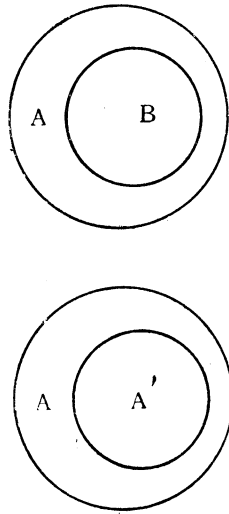


第三章 補充關係及びそれに關聯する動詞性

一

修飾限定することは内潜的なものを抽出し、之を外に明示することであるが、補充するといふことは、本來的に具有することなきものを外から附加して行くことである。内含的なものを外から附加することによつて、その觀念内容を擴充して行かうとするものである。故に兩者は同じく從屬の關係を成立せしめるものであるが、前者にあつては内屬的であり、後者にあつては外附的である。即ち圖示すれば上圖の如き相違がある



のである。しかし補充することは外附的であると言つても、それは無制限的に乃至は恣意的に行はれるものではない。そこには矢張、補充の能不能といつた制約的關係といふ如きものがなければならぬ。修飾に於ては、被修飾素に然るべき屬性内容がなければ修飾するといふことも不可能であつた。例へば複合觀念を以て

單一觀念を如何に修飾しようとしても、それは結局不成に終り、修飾關係に於ては被修飾素が常に修飾素を含み得

る、観念内容の幅を持つてゐなければならなかつた。補充に於ては勿論之と異なる意味のものではあるが、補充素と補充せられる要素との間に、矢張必然的な制約關係がなければならぬのである。それは如何なることをいふのであるか。

補充といふことが行はれるには、先づ観念内容が補充せらるべき状態にあるといふことがなければならぬ。被補充の性格といつたものの存在がなければならぬ。観念内容が補充せられるには、實體觀念の如く閉ぢられた完結的なものであつてはならぬ。それ自體に於て充足せられたものであつてはならぬ。整備せる概念であつてはならぬ。そこには補充などといふことをする餘地は全然なく、謂はゞそれは補充の閉止態のものでなければならぬ。しかし又之に反して、單にその観念内容が貧弱化せるものであつてもならぬ。程度の屬性觀念とか陳述的屬性觀念とか、或は情意的屬性觀念や接續的屬性觀念などの如く、觀念性が單一的であるからと言つて被補充の性格であるとは言へない。被補充の性格などといふ補充關係の観念内容は、修飾關係に於けるものなどとは異なる次元の觀念性に於て考察しなければならぬのである。

こゝに於て観念内容の構造に就いて一言して置かなければならぬ。言語の觀念的構造に就いては種々の方面から眺めて考察することができるのであるが、今は只こゝに關係あるもののみを述べることにする。語とか節などといふ種々の言語的要素には、觀念部（意義部）と文法部（形態部）とがあり、日本語では前者が常に先行的であり後者が常に後行的であるといふことに關しては已に周知の事實であらうと思ふ。しかし、かやうなことも只單一的に然るものではなく、原理的には殆んど無限に複合的に行はれるものでなければならぬ。例へば

(花)＋(が) (月)＋(に)

(打た)＋(れる) (讀め)＋(ない)

の如きものばかりではなく、之を上位的廣めれば

(花が)＋(咲く) (月に)＋(囁く)

(花が咲き)＋(鳥が啼く)

(頭を)＋(打たれる) (字は)＋(讀めない)

〔(もう)＋(少し)〕＋(大きく)〔(言へ)

の如きものの間にも、又之を下位的に深めれば

(打)＋(た)＋(れる) (讀)＋(め)＋(ない)

〔(讀)＋(ま)〕＋(せ)〔(られる)

の如きものの間にも見ることが出来る。更に

僕いやだ。 これ欲しい。

花咲き鳥啼く。

の如く言へるところから、「僕」「これ」「花」「鳥」等の實體語それ自身にも觀念部と文法部との別を考へることが出来るのである。又

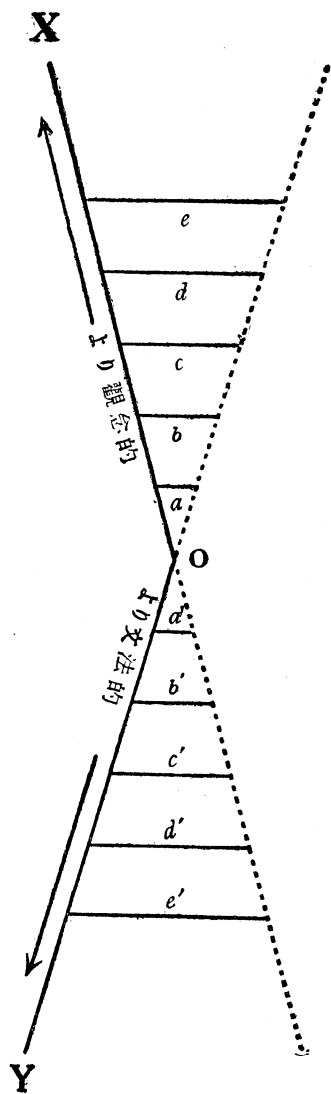
黄ばむ いやがる 春めく

などは語幹、語尾の分析ばかりではなく、それよりも優先的に語幹を中斷し、語根、接辭に分析することが出来るのである。例へば

〔黄〕+〔ば〕+〔む〕+〔い〕 〔さや〕+〔が〕+〔る〕+〔い〕 〔春〕+〔め〕+〔く〕+〔い〕
の如く、或は又

(さ)+(夜) (か)+(弱さ) (け)+(劣る)
(み)+(位) (お)+(顔) (ま)+(心)

の如く、語根を突破し之に先行する接頭辭もある。かやうに觀念的部面と文法的部面との分釋は、殆んど無限大無限小とも稱せらるべき程複雑に行ふことが出来るのであるが、それは如何なることを意味するであらうか。私はそれは一面に於て、文法部的構造の複合的延展性を表示するものであると同時に、他面に於て觀念部的構造の複合的延展性を表示するものでなければならぬと思ふ。即ち文法部と稱するものの中にも、觀念部と稱するものの中にも、より先行的な部面はより觀念的であり、より後行的な部面はより文法的であると言ふ原理性が限りなく働いてゐると見なければならぬと思ふ。即ち略々



の如き關係であらう。しかして修飾關係といふのは觀念的部面のより後行的なところに成立する觀念的相關であり、補充關係といふのは觀念部のより先行的なる部面に於ける觀念的相關である。前者は觀念部の底深きところに於ける關係であり、後者はその比較的上表部に於ける關係である。

しかし、補充關係が觀念的部面の先行的なところに成立すると言つても、それは單に語彙的觀念或は意義論的觀念の如きものを意味するのではない。語彙的觀念の如きものに於て文法關係の成立するよすがはない。とは言へ又、修飾關係が成立して行く深部的觀念内容でもない。機能範疇の基礎づけを構想し得る底の言語の根元的觀念性でもなく。例へば

(赤い) : (赤らむ)

(細い) : (細む)

(白い) : (白む)

(にぶい) : (にぶる)

(よわい) : (よわる)

の如き對比に於ける觀念内容は修飾關係的なものである。しかし、補充關係はかやうな觀念的末端部に到達する以前、例へば

(赤らむ) : (赤らめる)

(黒む) : (黒める)

(白む) : (白める)

(にぶる) : (にぶらす)

(よわる) : (よわめる)

の如く對比せられる觀念内容に於て行はれるものでなければならぬ。謂はゞ、補充關係的觀念内容、即ち補充素的性格は語彙的なものと修飾關係的なものととの中間部に於て見ることができるのである。例へば

取ら一れ一よう

捨て一られ一た

取ら一せ一なう

捨て一させ一たう

の如き、助動詞を接合せるものにより其の觀念的延展の相を見ると、此の關係が今少しく明瞭になるであらう。右

の中第一の分節は語彙的觀念部に該當する部分であり、第三の分節は修飾關係的觀念部とも言ふべき部分であり、而して中間の第二の分節は即ち補充關係的觀念部とも言ふべき部分である。しかし、之等の詳細な考察は又後で行ふこととする。

被補充的性格は斯く中間的觀念部位に存するところから、實體觀念の如く閉止的完結的なものや、程度の屬性觀念とか陳述的屬性觀念とか情意的屬性觀念或は接續的屬性觀念の如き單一的なものには、さやうなことは絶對にないのである。故に之は動詞などの如き現象的屬性觀念、或は形容詞とか狀態的從屬語などの如き狀態的屬性觀念にのみ存する事柄であるとしなければならぬのである。殊に現象的屬性觀念はかゝる被補充的性格が最も多方的であり、それが動詞的範疇の一特徴であると考へてもよい程のものであり、且又動詞的陳述の下位的範疇の重要な指標ともなるべきものである。

被補充的性格といふのは觀念的構造の中間的觀念部であるが、それは修飾關係的觀念内容の如く單に積極的なものではない。何れかと言へば消極的受容的マイナス的でなければならぬ。何等か附與せられんとする待機的觀念の相である。充實せる觀念ではなく、缺如態としての形相的觀念である。觀念の相とか態とかと言つた形式的なものである。何物か外から附加せらるべく之を待受けてゐる、單なる觀念の姿形である。補充素といふのは、かゝる觀念の相に對する附與物として關係する要素に外ならない。故に外附的と言ふのである。内屬とか修飾とか限定とかといふことは、基體となるものが本來的に具有してゐる屬性の中、或一つのを特に表明せんが爲に然るべき要素を關係せしめるのであるが、補充とか外附とかといふことは、内容的缺如態を充實せしめんが爲に然るべき要

素を關係せしめるのである。かやうな補充關係に於ける補充素は、如何なる觀念内容の言語でなければならぬか。それは言ふまでもなく、最も内容的に充實せるものでなければならぬ。從屬語とか形容詞とか動詞などと言つた單一的なもの、或は未完體のものであつてはならぬ。さやうなものを附加したのでは其の機能を充分に果すことが出來ないばかりではなく却つて混亂に陥つてしまふ。故に補充素は常に實體觀念を以てしなければならぬのである。縱令、本來的に實體觀念ではなくても、矢張それに準ぜらるべきものとして形成せられた、所謂準體言的なものでなければならぬ。かゝる補充關係の補充素たるの地位を補格と稱するのであるが、體言の特徴は一面この補格たり得るといふ點にあるとも言へる。

二

從屬關係は一般に被從屬素の觀念内容に支配せられるものであるが、それらの中外附的な補充關係は内屬的な修飾關係にも増して其の傾向が強い。即ち修飾關係は觀念的機構の深部にまで徹底せる相關々係であるところから、修飾素の性質と多分に相呼應するところがなければならなかつた。しかし、補充關係は觀念的機構の中間部に於て已に然るべき補充素を要請し、之を待取らうとする相關々係であるところから、補充素の觀念性といふことよりも將に附與せられんとする觀念内容そのものを先づ問題とするのである。随つて修飾素として立つものは種々の異なる觀念性であつたが、補充素として立つものは十全に補充することの出來る實體觀念のみであるのである。しかしてその實體觀念は被補充素に對し何等影響を及ぼすことなく、只管それより制辭的影響を享受するだけである。か

かる制辭的影響が補格の種々相を現出し、それ／＼然るべき助詞添加によつて、それが表示せられるのである。

かくの如く先行的な補充素は、後行的な被補充素に全く制辭られるのであるから、補充關係の研究は被補充素の認識を基礎としなければならぬ。即ち被補充素の認識に確と足場を据ゑて、然る後補充素の之に關係する有様を觀取しなければならぬ。被補充素には如何なるものがあるであらうか。被補充的性格に就いては嚮にも述べたやうに、觀念的機構の中間部的のものであるから、かやうなものを有する觀念は先づ現象的屬性觀念、即ち事の觀念である。所謂動詞的觀念である。次に狀態的屬性觀念、即ち狀の觀念である。前者は動的であり、後者は靜的であることは言ふまでもない。前者は後者に時性を乘じたる四次元的觀念であり、後者は前者を時性を以て除したる空間的屬性觀念である。隨つて前者は後者に比して著しく被補充的性格に於て豊富であり、補充素の附加も極めて複雑多岐に亘つてゐる。そこで先づ、單純なる後者の方から眺めて行くこととする。

狀態的屬性觀念の語は、狀態的陳述語である形容詞と、助詞「に」又は「と」を添加し得る副詞即ち狀態的從屬語とである。之等の觀念内容は、修飾關係的觀念内容としてはそれ／＼相違あるものであるが、補充關係的觀念内容、即ち觀念機構の中間部的なものとしては略々共通的であると見てよいのである。故に之等に外附する補充素も大體に於て一樣的であると考へて差支がない。しかし、それは何れかと言へば補充素を必要とする場合は少く、又その補格的種別も極めて少いのである。その中最も特徴的なものは狀態的屬性に於ける比較の基準を示すものである。それには例へば

それよりこれの方がよい。 子供より下手だ。

父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

色よりも香こそあはれと思ほゆれ。

よそに見しよは今こそ勝れ。(萬葉)

の如く、助詞「より」(古くは「よ」も)を添へて表す。又、状態性の存立する所以の對標を示すものがある。之には助詞「に」を添へる性質のものと、助詞「と」を添へる性質のものとがある。「に」を添へるものには更に二つの範類がある。即ち單に存立する状態性の對標を示すものと、然るべき行動動作等に關する状態性の對標を示すものである。前者には又

甲は乙に同じい。 甲は乙に等しい。

おかあさんにそっくりだ。

偏に風の前の塵に同じ。

の如き類同的なものと

山に遠く。 都に近い。 もう九時に近い。

十二時にもうちよつとだ。

所は海に近くて谷迫れり。

言ふに易く行ふに難し。

帯に短く褌に長い。

それは世にも稀なことである。

これはあの人には或は無理であらう。

の如く、場所時間の遠近、物の長短大小多少、或は事の難易善惡などの對標を示す對比的なものとある。後者の行動動作に關する狀態性の對標を示すものは例へば

朋友に篤く、部下に親切である。

地理に暗いが、歴史に精しい。

父母に孝に、兄弟に友に。

の如きものである。以上は「に」を添へる性質のものであつたが、「と」を添へる性質のものは例へば

甲は乙と同じい。 甲は乙と等しい。

甲は乙と同一である。 甲は乙と同様だ。

の如き類同の對標を示すものゝみに於て行はれる。

右は狀態的屬性觀念を被補充素とする補充關係の普通のものであるが、こゝにそれらに類するものとして一種特別な補充關係がある。それは、狀態的屬性觀念が著しく形式化抽象化するものを被補充素とする補充關係である。

例へば

繪のやうに綺麗だ。

花のやうに美しい。

矢のやうに速い。

などの「やう」は、形式化抽象化せられた状態的觀念性の從屬語である。しかし「さやう」「かやう」「さう」「かう」の如きものとも異なり、全然積極的觀念性といつたものではなく、眞に消極的受容的觀念性の純乎たるものであると言はなければならぬ。「さやう」「かやう」……等は單に形式的抽象的なものであるから、寧ろそこに補充すべき餘地はないのであるが、此の「やう」は例へば「さやう」「かやう」の「さ」「か」に該當すべきものを常に補充して行かなければならぬのである。それがつまり、右の例の「繪の」とか「花の」とか「矢の」とかと言つた補充素である。又

飛ぶやうに賣れる。

よろしいやうに思ふ。

の如きものは、準體言を以て補充せるものと見なければならぬ。更に古代語では

夢のごと

昨日しも見けむがごと

天地の共に久しく

浪のむたか寄りかく寄り

君がむた行かましものを

引きのまにまに

君がまにまに

沖に住むを鴨の

などの如きものが盛に行はれてゐたやうである。

現象的屬性觀念の語は言ふまでもなく、現象的陳述語である動詞一般である。この現象的屬性觀念の内容は狀態的屬性觀念の内容と異なり、修飾關係的觀念内容としては略々共通であるが、補充關係的内容、即ち觀念機構の中間部的なものとしては複雑多岐を極めてゐる。故にかやうなものを被補充素とする補充關係にあつては、その動詞的性格の種々相に従つて各種各様の補格性が成立し之に關係するのである。勿論補格に立つ語は實體語であるが、それが被補充的性格に制辭られて様々の補格的性格を呈するのである。故に現象的屬性觀念を被補充素とする補充關係の考察は、根本的には先づ動詞性の真相を究明しなければならぬのである。現象的陳述語の觀念性による認識殊更その觀念的構造の中間部的範疇づけを徹底的に行はなければならぬ。しかも之を最も事實的に把握せんがためには、之に關係する補格の種々相を事例的媒介としなければならぬ。かやうな研究に於て古來最も創見に富む業績を残してゐるのは本居春庭の詞の通路であると思ふ。一體春庭の文法學的業績といふものは動詞研究に在ることは言ふまでもないことであるが、その中活用論としての詞の八衢に關してはその價值が充分に認められ、所謂八衢學の如きものすら成立してゐる勢であつたが、この通路に對しては餘り注意せられず、現今に於ても、それは單なる歴史的存在物の一つとして考察せられてゐるに過ぎない。しかし、通路には八衢に對立する重大な文法的意義があるのである。否、そこには八衢より以上の高度な動詞的認識が爲されたと言はなければならぬのである。即ち動詞自體内の機能範疇を試み、而も之を事實的に體系化せんとしてゐるのである。活用形態の研究は歌學的文法に

於て發生し、賀茂真淵とか谷川士清などを経て本居宣長の御國詞活用抄となり、或は富士谷派の裝抄の如きものに發展し、八衢以前に餘程その研究が成長してゐたのであつた。殊に鈴木朗の活語斷續譜の如きものからも多分に影響を受けてゐると見なければならぬのであるから、春庭の學才を以て、あの時代に八衢を述作し得たことは寧ろ當然のことゝ言はなければならぬ。然るに通路で爲されたやうな動詞の觀念性に關する範類は、それ以前に於て積極的に之が體系化を企圖せられたやうなことは殆んどなく、實に我が國文法學史上の獨歩的な業績であると稱しても過言ではないのである。勿論富士谷成章の如き人は已にかやうな事實に氣附いてゐた。例へば「あゆひ抄」の「大むね」下に掲げてある名目抄のぬき書に

一、内外の詞 世にいふ有情非情なり、内とは有情をいふ、外とは非情をいふ、又非情なりとも有情になしていふ時は唯内なり、師説深き理あり、こゝにいひつくしがたし。

一、裏表の詞 裏とは、みづからの上なり、表とは人、物、事のうへなり、但人、物、事のうへなりともしばらくそれが心になりていはゞ唯裏なり、師説しるしつくしがたし。

とある。その中、内外の詞といふのは

里言には外にあるといひ、内にあるといふをうたにはおしなべてありとのみよめれば心しらひしてある
 ぬるたがひに里すべし。(あゆひ抄・有倫)

とある如く語彙的識別に過ぎないが、裏表の詞といふのは眞の動詞性に關する識別である。しかしして

たのもしげに人にいひちぎるを「たのむ」有

辭とよみ、人のちぎりをたのみおもふをも「たのむ」無といふに

つきて、装のことわりしらぬ人まとふ事あり。人のたのむるは靡ありて「たのめて」とかよひ、人をたのむは靡なくして「たのみて」とかよふ、「やむ」と「やむる」「いたむ」と「いたむる」とあるがごとし、みな裏と表とのたがひにて「たのむる」「やむる」「いたむる」は「たのます」「やます」「いたます」のこゝろなり、装抄にくはし。(同上・令身)

と言つてゐる裏表は所謂自他の別であり、又

みづからおもひたちて「いまゆかん」「いさかへらん」などいふは裏なり、思ひやりて「とあらん」「かゝらん」などいふは表也。(同上・將倫)

と言つてゐる裏表は、自動的なものゝ中、發動的なもの(みづから然する)と状態的なもの(おのづから然する)との區別である。又受動的なる被身と使動的な令身、及び爲身を區別し(之が御杖の著と稱せられる三身圖説の三身である。しかし、爲身に對して成章は被身令身などと同列的に考へてゐるのではない。)更に

凡被身は人につかはるゝ心令身は人をつかふ心にて火水のたがひなれどかへりてよく似かよふ事あり、いづれも人をかしづきていへる中にいさゝかかしづきては「たゝる」「ゐらる」など被身の詞となり、ふかくもてあがめては「たゝし」「ゐさせ」など令身の詞にいふ、又「おはす」とかしづきいふ詞を「おはします」といふは、ふたゝび令身の詞を用たる也……(同上)

の如き點にまで説き及ぼしてゐる。以上の如き成章の教説は、恐らく動詞性認識の萌芽と見て差支ないであらう。宣長の御國詞活用抄は、一見單なる活用形態の研究であるかの如く思はれるのであるが、深く之を考へてみると、

後に展開すべき動詞性に關する識別をも内含してゐるのである。それは先づその凡例に
 合す云々合する云々とやうに二やうにいはれて、いづれとも定がたきあり、凡て令の意の詞に此格多し。

と言つてゐるが、之は當時の學界に與へた一つの問題であると思つてよい。しかして活用抄の組織を見ると第一會より第二十七會までに分れてゐるが、會毎に然るべき語を語頭の音によつて分類してある。之は勿論辭書的な類別法で語彙的認識に有力な暗示を與へるものである。次に之に對立すべき重要な事柄として、その二十七會の類別は語尾による識別で、謂はゞ文法的認識の展示と見做すべきものである。しかしてかゝる二十七會的類別には二つの契機を包藏してゐる。その第一は活用形態の認識であつて、それが鈴木朗の活語斷續譜などを媒介として春庭に至つて八衢を形成せしめたものである（斷續譜は一方富士谷派の裝抄からも系統をひいてゐる）。その第二は春庭が通路で爲した動詞性研究の先鞭とも見るべきものであるが、かやうなものが活用抄に於て如何なる形で現れてゐるか。それは言ふまでもなく二十七會的類別より活用形態的認識の部分を捨象せる殘餘である。その殘餘とは如何なるものであるか。一體活用といふことは常に語尾的最末端に於て行はれる現象でなければならぬ。例へば

(行か) (行き) (行く) (行け)
 の「か、き、く、け」の如きものは、普通に語尾と稱せられるものであるが、眞の活用現象といへば「aiue」

の如き變化である。又

(受け) (受ける) 受けれ

の如きものでは「e-ru e-re」であり、更に

(得) (得る) (得れ)

の如きものでは活用部の本體と語幹とが共通である。つまり活用形態の認識といふことは、五十音圖の如きものを基準にして言へば段的認識であり、之に對して行的認識とも稱すべきものが即ち動詞の觀念性認識でなければならぬ。故に形態的認識を捨象せる殘餘とは、段的認識に對する行的認識であり、通路の萌芽は活用抄二十七會類別のかやうなところにあるのである。

通路が成立する以前に於て、成章とか宣長とかと言つた人々の研究の裡にその萌芽的なものが生じてゐたのであるが、之を眞に意識的に有目的々に研究し體系づけたものではなかつた。動詞性の研究が文法學上價值あるものであるといふことを自覺し、之を組織立てゝ當代文法界に寄與せんとしたものではなかつた。それは手爾波研究とか活用研究などといふものゝ、餘論的末技的なものに過ぎなかつた。然るに春庭は眞に之を對象としその體系化を企圖せるもので、此の點よりして通路は我が國文法學史上實に獨歩的存在と言はなければならぬのである。

四

通路三卷の説くところは動詞の觀念性を中心とするものであるが、その中、上卷「詞の自他の事」に於て主として之を論述してゐるのである。即ち先づ

歌よむにもふみかくにも事をするすにもよろづの事をわかち其さまをくはしくしらするなればもはら此自他の言葉の活をむねとこゝろうべきわざなりそはおのづからのさだまり有てこなたのことをいふにはこなたにつか

ふべきことばをもちひかなたの事をかたるにはかなたに用ふべき詞をつかはざれば其事くはしくわかれず自他混雜して詞とゝのはず其さま聞えがたければなほざりに思ひすぐさすよくわきまへおくべき事なりそもく此はたらきは上にもいへる如く千よろづのことをくはしくいひわかつわざなれば其のはたらきさまもくさくおほかるを世の人自他の詞はたゞ煙などのたつといふはおのづからたつことをいひたつるといふは人のたつ事をいひまた花のちるといふはおのづからちることちらすといふはかせなどのちらすことなどゝのみなほざりに思ひてくはしく考へしるべき事とおもひたらす又この事をとかくあげつらへる書もなければおのづから心をつくるともがらもなくおのれ歌よくよみものよくこゝろえたりとおもふ人もおのづから取はづしてはあやまる事なきにしもあらずましてうひまなびのともがらはいとたどくしく常にあやまることおほければ其定りををしへたとさむとてくはしくかきしるせるなり。

と言ひ自他研究の重要な所以を明かにしてゐる。次に「自他の詞六つにわかれたれば今六段に次第してその詞をほどこし一目に見わたしこゝろえやすからむために圖をつくりてさとしたるなり」と言ひ左の如き範疇による圖表を掲げてゐる。

第一段、おのづから然る、みづから然する

第二段、物を然する

第三段、他に然する

第四段、他に然さずする

第五段、おのづから然せらるゝ

第六段、他に然せらるゝ

右の六段中、第一段第二段第三段は本來的動詞性による區別であるが、第四段第五段第六段は「る(れる)」「らる(られる)」「す(せる)」「さす(させる)」「等」の助動詞を添加することによつて構成せられたる動詞性による區別である。而して前者の中、第一段は自動的なもの、第二段第三段は他動的なものである。(春庭は「第一段と第二段」といふとちかく第三段と第四段ともいふと近く云々」と言つてゐるが、第三段と第四段とが近く考へられるのは、春庭自身もその直前に於て「第三段はおほく佐行下二段のはたらきなれどいとまれ／＼には外のはたらきもまじれり第四段は佐行下二段の活にかぎれり」と言つてゐる如く、單に活用語尾の外形が類似してゐるからである。第三段は本來的語尾による動詞性、第四段は所謂使役助動詞添加による動詞性で、兩者は明かに區別あるべきものである。)又第一段の「おのづから然る」と「みづから然する」とは權田直助が語學自在に於て爲したやうに分立せしむべきものである。そこには恰も成章が脚結抄の將倫に於て、思ひやる方が表で、みづから思ひたつ方が裏であると識別したやうに、狀態的なもの發動的なものと言つた區別が在るのである。次に他動的な第二段と第三段とは如何なる相違があるか。第二段は例へば

着物を着る。芝居を見る。

の如く對象と客者とは未分的なものであるが、第三段は例へば

子供に着物を着せる。外人に芝居を見せる。

の如く対象と客者とが分立してゐるものである。故に第三段の方は實は單なる「他に然する」ではなくて、寧ろ「他に物を然する」などとすべき性質のものと思ふ。之等と關聯して考察せらるべきものは第四段の内容である。第四段は「他に然さする」とあるもので、つまり使動的なるものであるが、之にも例へば

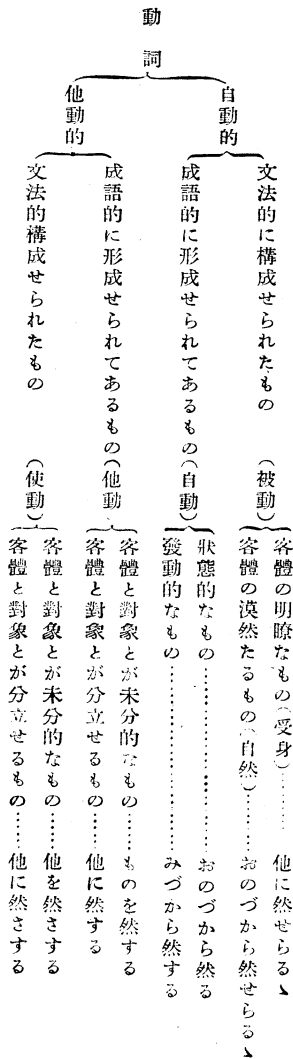
馬を走らせる。 子供を眠らせる。

の如く対象と客者とが未だ分立しないものと

馬に水を飲ませる。 大工に家を建てさせる。

の如く対象と客者とが明瞭に分立するものがある。前者は「他を然さする」ものであり、後者は「他に物を然さする」ものであり、随つて第四段の中にも二別あるべきものと考へられる。

上述の如くであるから、春庭の六範疇は之を徹底して行くと、結局次の八範疇となるべきものではなからうか。



五

春庭が通路に於て行つた動詞性の六範疇は檀田直助の語學自在に至つて七範疇とせられたが、私は更に進んで之を八範疇としなければならぬと思ふのである。以下この事に就いて少しく事實的に検討し、旁々動詞性の第一義的範疇とも目すべきものを明かにし、補充關係の根幹を正して見たいと思ふ。

八範疇中、觀念性の最も單純なるものは「おのづから然る」動詞である。それは例へば

影が映る。障子が明る。鐘が鳴る。

日が暮れる。日が陰る。火が燃える。火が消える。水

車が廻る。小屋が潰れる。夜が更ける。足が濡れる。着物が汚れる。山が崩れる。川が塞がる。

田畑が荒れる。家運が衰へる。世が改まる。國が治まる。人手が餘る。源氏が興る。姿が変れる。

顔が似る。柿の實が赤らむ。花がしぼまる。主義が變る。罪業が重なる。

の如きもので、何等主體的なものゝ力の加はるべき餘地のない、自然現象そのまゝが陳述内容となつてゐるものである。主體が自然と即一的で、何等積極的に作用することなく、無爲にして化し行く狀態的な現象觀念である。眞に主體即環境の現象性である。

之に反して「みづから然する」動詞では、主體が環境から抜け出てゐる。意志が發動してゐる。例へば

人が行く。味方が進む。敵が退く。

群衆が去る。父が歸る。客が来る。

兄が急ぐ。 子供が遊ぶ。 母が起きる。

子供が泣く。 鳥が啼く。 犬が吠える。

船頭が叫ぶ。 赤が勝つ。 白が負ける。

馬が走る。 鳥が飛ぶ。 虫が匍ふ。

の如きもの、或は

船が出る。 車が通る。 汽車が動く。

筏が下る。 舟が戻る。 汽船が溯る。

獨樂が廻る。 飛行機が飛ぶ。

の如く、主體的なものが常に或種の動作作用を發動的に起してゐるものである。主格の有意的動作作用を陳述内容とするものである。但しこゝで意志とか有意とかと言ふのは、單なる心理的なもののみに就き然考へてはならぬことは勿論である。

右の「おのづから然る」「みづから然する」の二つは、春庭が第一段に配したものであり、普通に自動詞などと稱せられてゐるものである。しかし眞に自動詞と稱せらるべきものは寧ろ後者の「みづから然する」のみで、前者の「おのづから然る」は自動詞以下のものでなければならぬ。故に之を自然的動詞と自動的動詞、或は狀態的動詞と發動的動詞などといふやうに區別せらるべきものである。此の二者の恰度中間的なものとも考へらるべきものに「ある」「をる」「ゐる」の如き存在動詞がある。即ち存在といふことは、單なる自然とか狀態とかといふものでな

く、明かにそこに主體的なるものの意志とか力とかといふものがなければならぬ。自律的でなければならぬ。さらばと言つて自ら働き作用し發動するものでもない。動的ではなく靜的である。故に存在は自律的自然とか自發的狀態などとも稱すべき現象であり、隨つて存在動詞は兩面相的動詞とも見るべく、兎も角自動詞と稱せられるもの間に於ける特異な動詞である。かやうな點から、存在動詞は一面に於て又全自動詞を抱擁し統括し、之等を代表しその代理ともなるべきものである。

發動的な「みづから然する」は、狀態的な「おのづから然る」に於て環境と即一してゐた主體が之を超え自律的となつたものであるが、次に「ものを然する」動詞は更に環境から對象物を切取つて之を目的とし處分せんとする觀念性を表示する。即ち有目的々動作の動詞である。故に之にはその處分せんとする目的對象が常に伴はなければならぬ。動作作用の目的對象を表示する補充素が關係しなければならぬ。然らざれば缺如態の動詞性である。かゝる「ものを然する」動詞性に於ける目的對象表示の補格を特に目的格、對象格、或は處置格などと稱するのである。しかしてその對象となるものには、例へば

花を折る。

花を見る。 物を取る。

金品を盗む。

本を読む。 戸を開く。

天を仰ぐ。

志を遂げる。 名を舉げる。

夜を明す。

書を學ぶ。 物を調べる。

着物を着る。

石を並べる。 飯を炊く。

血を吐く。 身を滌ぐ。 金を預かる。

の「花」「物」「本」の如き無意的な單なる物象の場合と、

犬を追ふ。 子を誡める。 人を疎む。

友を誘ふ。 女中を呼ぶ。 客を招く

人を憐む。 母を慰める。 生徒を導く。

父を諫める。 子を叱る。 猫を飼ふ。

虫を捕へる。 神を祀る。 佛を信ずる。

自己を反省する。 心をいためる。

の「犬」「子」「人」の如き有意的な他者の場合とある。

「他に然する」動詞は詳しく言へば「他にもものを然する」もので、前者の「ものを然する」動詞よりも更に一步を進めた動詞性を有する。即ち

人に金を貸す

村人に道を尋ねる。 子に財産を譲る。

生徒に學習法を教へる

弟子に奥義を授ける。 友に近況を知らせる。

父に進級を通知する。 母に行先を告げる。

軍人に勅語を賜ふ。

名士に物を聽く。

娘に芝居を見せる。

雛に水を與へる。

の如く、物を處分する動作作用が、主體的なるものに對立する客體的なものに對して行はれる性質の陳述内容を具有するものである。「ものを然する」動詞に於ては無意的物象たると有意的他者たるとを問はず、同様之を物の資格として處分するのであつたが、此の「他に然する」ものに於ては處分する目的對象は物で、その動作作用を、主體に對立する客體に向かつて行ふのである。即ち前者は對象的なものも客體的なものも混同して取扱ふものであるが、之は兩者を明瞭に分立せしめ、それ／＼の地位資格に於て取扱つて行くものである。故に此の種の動詞にありては、客體的なものを表示する補充素は必須的なものでなければならぬ。しかしてかゝる補格を特に客體格或は客格など稱するのである。

右の「ものを然する」「他に然する」の二は通路に於て第二段第三段に配するものであり、現今普通に他動詞と稱せられてゐるものである。しかし眞の他動は寧ろ「ものを然する」點にあるのであつて、「他に然する」は他動以上のものと考へなければならぬ。一體他動といふことは如何なることであるか。他動とは目的物を環境より分立せしめ、之と自家の動作作用とが即一する分析綜合の過程である。働くとか作爲とか製作とかといふことの眞相はかやうなところにあるのである。我と物との非連續的連續關係である。然るに社會的歴史的世界に於ては、かゝる作爲性を超え「ものを然する」ことを内容に持つ對他的行動でなければならぬ。他に然々することではなければならぬ。この世界は我と汝との對在的世界であるが、かゝる世界の眞の現象は、我が汝に對し汝が我に對して何等かの

行動を起すことでなければならぬ。我と汝との行でなければならぬ。故に前者と後者とは明かに區別せらるべきものであり、後者は他動以上の他動、勝義の他動である。前者に於ける「ものを然する」動詞を作為動詞とすれば、後者に於ける「他に然する」動詞は行動動詞である。しかし之等の中に位すべきものとして、「する」「なす」などといふ動詞がある。之は形式的な作為動詞と考へてよい節もあるのであるが、しかし一方

私は汝に然々の事をする。

などといふやうに、行動的に使用せられるのである。行作兼用の動詞である。随つて自動詞に於ける「ある……」の如くに、之は全他動詞を抱擁し成立せしめ又その代理代表ともなるべきものである。

次にこゝで注意しなければならぬことは、他動的なものに先行する、補充素、即ち目的格には多く助詞「を」が添加せられ自動的なものの補充素には餘りさやうな事が行はれぬことから、他動詞は助詞「を」受ける動詞であるなどと、單に之を形態的に規定してはならぬことである。成程嚮に掲げた諸例でもわかるやうに他動の対象を示すには多く「を」助詞を添加する。しかし

花見る客。 冷汗かいた。 お話しませう。

訓誡する。 これ欲しいの。 あれ買つて。

苦情ばかり言ふ。 何か見て來たか。

子供だけ連れて行く。 小學校ぐらゐ卒業して何になる。

の如く「を」添へないものもある。又之と反對に自動でも、發動的なものの中移動性のものは、その移動する地域

地點場面を示す場合には補充素に「を」が添へられる。例へば

こゝを去る。 港を出る。 國を立つ。

山道を辿る。 坂を下る。 川を溯る。

池を繞る。 道を急ぐ。 空を飛ぶ。

川を渉る。 橋を渡る。 岨を攀ちる。

奥地を通る。 途を歩く。 家路を行く。

レールの上を動く。 辻を過ぎる。

の如きものである。故に助詞「を」は他動の目的對象を示すために用ひられるものではあるが、單に之があるとかないとかといふ外面的形態のみを以て、他動自動を決定する標準としてはならぬのである。補充素と被補充素との眞の内面的關係から常に眺めて行かなければならぬのである。

六

以上は單にそれ自身の自動他動であつたが、更に複雑なる動詞性がなければならぬ。それは自動的なものとしては、單なるそれ自身の作用現象ではなく、他の何等かの力によつて動かされてゐる性質のものである。之は一般に被動或は受動などと稱せらるべきものである。又他動的なるものとして、それ自身が直接に手を下すことなく、他を使役してその動作作用を爲さしめるものである。之は一般に使動或は令動などと稱せらるべきものである。然

るに此の被動や使動は元來成語として成立してゐないものであるから、その度毎に文法的に工作をしなければならぬ。何等か既存の言語材料を用ひて、所要の形態を構成しなければならぬ。故に被動使動の本質を考察する爲には、先づそれらの文法的構成法を明かにしなければならぬ。

被動を構成するには、その先行部（觀念素）として一般に發動性の動詞、即ち他動或は發動的な自動の動詞を用ひ、後行部（文法素）として助動詞「れる（る）」「られる（らる）」を用ひる。しかしてその構成方式は、動詞未然形に然るべき助動詞を接合するのであるが、四段系動詞には「れる（る）」を一段系動詞には「られる（らる）」を接合するのである。例へば

死な—れる	泣か—れる	歸ら—れる
降ら—れる	折ら—れる	讀ま—れる
盗ま—れる	衝か—れる	待た—れる
招か—れる	導か—れる	譲ら—れる
逃げ—られる	誠め—られる	任せ—られる
尋ね—られる	教へ—られる	捕へ—られる
着—られる	起き—られる	見—られる
來—られる	爲—られる	

の如きものである。しかして右の如く構成せられたものは大體次の四通りの意に用ひられる。

受身 自然

可能 敬意

その中受身と自然とは、助動詞接合の文法的工作に呼應して、被動の主體に對する客體の存在といふことがあるのであるが、可能と敬意とは單に助動詞接合によつてのみ成立するのであつて、客體的なものの存立することなきものである。隨つて後の二つは、助動詞接合といふ點から見れば前二者と同様であるが、その實、此處で考察せんとする被動とは何等關係のないものと言はなければならぬ。故に今は只受身と自然だけを問題とする。

受身と自然との相違は如何なる點に在るか。前者は被動主體に何等か影響を及ぼし干渉を加へてゐる客體物が、明かにそれと指摘し得らるべき性質のものであるが、後者は主體を動かし之に何等かの影響を及ぼしてゐる客體となるものの存在が肯定し得らるゝも、明かにそれと指摘することの出来ない性質のものである。即ち受身は意志が壓迫せられ、謂はゞ被の感を感じつゝ行はれる動作現象であり、自然は全く意志を抑平め無爲的とも言ふべき状態となれる成行的な現象である。故に前者では影響し壓迫し干渉するものが明かに對在してゐなければならぬが、後者では事實それを動かし何等かの影響を與へつゝある勢力があるにしても、それが主體に對在する必要なく、常に現象の裡面に内潜してゐるのである。「他に然せらるゝ」「おのづから然せらるゝ」の眞義はかやうなところにあるのである。前者は客體が顯現的明示的で、その對在が勝義的であり、後者は客體が潜在的漠然的でその對在が實は最勝義の極み抱擁的となつたものである。

かやうにして壓迫せられ被を感じるものは、未だ有意的なるものでなければならぬ。受身の主格は常に有意的な

「者」として取扱はれるものでなければならぬ。然るに單なる事の成行に任せたるものも早有意的である必要などはなく、寧ろ無意的でなければならぬ。自然の主格は無意的な「物」として取扱はれるものでなければならぬ。斯くて受身と自然とは、可能敬意などと共に助動詞接合の外的形態に於てはその軌を等しうするものであるが、相違點は主客の性質に在ると見なければならぬのである。即ち受身では客格が顯在的で主格が有意的でなければならず、自然では客格が潜在的で主格が無意的でなければならぬ。例へば

子供が母に叱られる。

犬が子供に追はれる。

とう／＼雨に降られた。

の如きものは受身であり、

橋が架けられる。

弔辭が讀まれた。

幕が張られた。

の如きものは自然である。

受身の客體は顯在的であり主體は有意的であり、自然の客體は潜在的であり主體は無意的であるといふことは如何なることを意味するか。嚮にも多少觸れたやうに、可能と敬意とは一般に發動的な觀念性のものならば、自動他動は如何なる動詞に對しても、助動詞「れる」「られる」等を接合しさへすれば之を構成することが出来るのであ

るが、受身自然はさうはいかない。先行部となる動詞性には、受身となるべきものと自然となるべきものといふやうにそれ／＼に區別があるのである。それは何かから來るかと言へば、受身構成の爲客體が顯在的、主體が有意的となり、自然構成の爲客體が潜在的、主體が無意的となり得るか否かといふことに外ならない。發動的能動的なるものが被動とか受動とかといふものになる爲には、主客の地位が顛倒するのであるが、斯くなる結果に於て、受身の條件として客格の顯在、主格の有意を充足し、自然の條件として客格の潜在、主格の無意を充足し得るか否かといふことが、受身となるべき動詞、自然となるべき動詞を決定するのである。例へば同じく「ものを然する」他動

(一) (花を) 折る (橋を) 架ける (弔辭を) 讀む

(二) (賊を) 捕へる (子供を) 救ふ (犬を) 飼ふ

の如きものを先行部として被動を構成するとする。その場合

花が子供に折られる。 橋が人に架けられる。

弔辭が市長に讀まれる。

の如き言ひ方は、外形的には受身のやうであるが日本語では許されない。それは「花」「橋」「弔辭」などといふ、主格に立つてゐるものが、無意的な單なる「物」に過ぎないからである。受身が成立するには

賊が人々に捕へられる。

子供が船頭に救はれる。

犬が従僕に飼はれる。

の如くその主格が「賊」「子供」「犬」などといふやうに、有意的な「者」となるべき動詞を先行部としなければならぬのである。しかし

賊が捕へられる。

子供が救はれる。

犬が飼はれる。

の如くしても自然にはならぬ。それは主格が有意的で、而もその客格が容易に聯想せられるからである。自然となるには

花が折られる。

橋が架けられる。

弔辭が讀まれる。

の如く主格が無意的で、それに對する客體的なものが漠として現れないものでなければならぬ。此處に於て考へられることは、同じく「ものを然する」他動でも、「もの」が有意的な「者」の場合は受身を成立せしめ、「もの」が無意的な「物」の場合は自然を成立せしめる事である。

右の如き事實は「ものを然する」他動の如く、「もの」が目的對象と客體物とを混同してゐる動詞に於ては明瞭に區別して行かなければならぬ。しかし「他に然する」他動、例へば

母が子供に文字を教へる。

父が長子に財産を譲る。

の如く目的格と客體格とが分立してゐるものでは

子供が母に文字を教へられる。

長子が父に財産を譲られる。

の如く、その主客を顛倒することにより何れも受身となり自然となることがないのであるから、事が極めて明瞭である。又使動の中「他を然さす」ものは前者の場合と略々同様であり、「他に然さす」ものは後者の場合と略々同様である。但し自然が成立し得ないから、結局受身だけに就いて考へて行けばよいのである。例へば

花を咲かせる。 風を吹かせる。

雨を降らせる。

の如きものに於ては、受身は勿論普通は自然も成立し得ないのである。只

子供を眠らせる。 母を泣かせる。

馬を走らせる。

の如きもの、或は

子供に着物を着せる。

大工に家を建てさせる。

生徒に本を読ませる。

の如きものに於て、

子供が母に眠らせられる。

母が子に泣かせられる。

馬が御者に走らせられる。

子供が母に着物を着せられる。

大工が請負に家を建てさせられる。

生徒が教師に本を読ませられる。

の如く受身が成立する。又發動的な自動、即ち「みづから然る」ものでも

子が母に死なれる。母が子に泣かれる。

巡査が賊に逃げられる。

父に先立たれる。友達に歸られる。

の如く、有意的な主客の對立を考へ得るものでは受身が成立する。之と共に考へなければならぬのは、自然の成立すべき「もの（物）を然する」他動に於ても

園主が子供に花を折られる。

賊に金品を強奪される。

の如く、有意的な主客の對立を考へ得る場合には受身が成立する。しかして前者は「もの（者）を然する」他動から成立せるものと略々同様であり、後者は「他に然する」他動から成立せるものと略々同様である。之に反し、發動的なる自動に於ても、主體的なるものを潜在的ならしめることにより自然が成立する。例へば

自然と泣かれる。

おのづから急がれる。

思はず知らず進まれる。

おのづと飛ばれる。

自然に起きられて来る。

の如きものである。

以上は受身と自然との構成せらるべき先行部的動詞性に就いて大略検討して見たのであるが、免も角被動或は受動的なものは、發動能動に對蹠的なものとして構成せられるのであるから、より發動的なるものがより被動的なものを成立せしめると考へなければならぬ。此の意味から、被動構成の中心的な素材動詞は「ものを然する」「ものに在ると言はなければならぬ。しかし「ものを然する」の「もの」には「者」と「物」とがある。有意的なる「もの」と無意的なる「もの」とがある。前者を素材動詞としては「他に然せらるゝ」受身が成立し、後者を素材動詞としては「おのづから然せらるゝ」自然が成立する。しかし前者を押進めその他動面を展開して行くところに「他に然する」「他を然さする」「他に然さする」等があり、それらが素材動詞となつて又種々の受身形が成立して行くのである。しかし翻つて、「もの（者）」を然する「自然形成立の動詞に於て、「他に然する」より生ずる如き受身形をとり得るもの、或は「みづから然する」發動的な自動詞に於て、「もの（者）」を然する」より生ずる如き受身形をとり得るものもある。又自然に於ても、「みづから然する」の主體を潜在せしめることにより「もの（物）」を然するより生ずる如き意味の自然を成立せしめることが出来る。

[illegible]

A Δ' は受身を構成し得る動詞性領域

B, B' は自然を構成し得る動詞性領域

使動を構成するには、その先行部（觀念素）として一般にあらゆる動詞を用ひることが出來、後行部（文要素）として助動詞「せる（す）」「させる（さす）」及び「しめる（しむ）」を用ひる。しかしてその構成方式は被動の場合と同様に動詞未然形に然るべき助動詞を接合するのであるが、四段系動詞には「せる（す）」を一段系動詞には「させる（さす）」を、又「しめる（しむ）」は四段系にも一段系にも共に接合することが出来る。例へば

死な—せる
泣か—せる
歸ら—せる

降ら—せる
折ら—せる
讀ま—せる

盗ま—せる
衝か—せる
待た—せる

招か—しめる
導か—しめる
譲ら—しめる

逃げ—させる
誠め—させる
任せ—させる

誠め—させる

任せ！させる

尋ね—させる 教へ—させる 捉へ—させる

起き—させる 見—させる 來—させる

受け—しめる 研究せ—しめる 射—しめる

の如きものである。しかし右の如く構成せられたものは

使役 敬意 (文語)

の二つの場合に行はれるのであるが、敬意の方は客體の存在することなき絶對的のもので、使動とは何等關係のないものであるから、こゝでは只使役だけを問題とする。

使役を構成するには、自動的なものを素材動詞とする場合と他動的なものを素材動詞とする場合と大體二つに分けて考へることが出来る。しかして自動的なものを素材動詞としてその先行部とするものは「他を然さする」ものとなり、他動的なものを素材動詞としてその先行部とするものは「他に然さする」ものとなる。前者は例へば

馬が走る。——→ 馬を走らせる。

鳥が飛ぶ。——→ 鳥を飛ばせる。

花が咲く。——→ 花を咲かせる。

枝が折れる。——→ 枝を折れさせる。

子供が眠る。——→ 子供を眠らせる。

母が泣く。——→ 母を泣かせる。

の如きもので、素材動詞に於ける主格を目的格（客格と混同的なる）とし更に上位的な主格が現れるものである。しかし

（水車が）廻る ↑ ↓ （水車を）廻す

（山が）崩れる ↑ ↓ （山を）崩す

（火が）燃える ↑ ↓ （火を）燃す

（汽車が）動く ↑ ↓ （汽車を）動かす

（船が）出る ↑ ↓ （船を）出す

の如く、自他の對偶あるものに於ては「水車を廻らせる」「山を崩れさせる」「火を燃えさせる」「汽車を動かせる」「船を出させる」などといふやうな「他を然さする」使役形をとらないのが普通の言ひ方である。後者の他動的なものからするものは、例へば

（一） 子供が花を折る。 ↓ 子供に花を折らせる。

犬が櫓を引く。 ↓ 犬に櫓を引かせる。

書生が浄書をする。 ↓ 書生に浄書をさせる。

大工が家を建てる。 ↓ 大工に家を建てさせる。

生徒が本を読む。 ↓ 生徒に本を讀ましめる。

或は

(二) 父が子に財産を譲る。――→ 父に（話して）子に財産を譲らせる。

記者が名士に物を聴く。――→ 記者に（命じて）名士に物を聴かせる。

従者が村人に途を尋ねる。――→ 従者をして村人に途を尋ねしめる。

などの如きものである。然して(一)の方は「ものを然する」ものから、(二)の方は「他に然する」ものから構成せられたものである。何れも素材動詞の主格を客格に引下げ、そこに新な主格が現れるものである。只(二)の方は素材動詞に於て已に客體補充があるものであるから、主格より成れる第二次客格とその第一次客格との地位が混同する虞ある爲、常に第二次客格に「をして」「話して」「命じて」「言ひつけて」……等の使役の意を持つ補助動詞を添加する。勿論

書生をして淨書せしめる。

大工に命じ家を建てさせる。

の如く(一)のものにかゝる補助動詞を用ひても差支ない。

七

以上は春庭が通路に於て行つた動詞の觀念性的識別の六範疇を、語學自在などの七範疇的展開から更に八範疇に押進め、その事實的検討を爲したのであつたが、現象性的屬性觀念が斯く八範疇に分れるといふことは如何なることであるか。現象性といふことは嚮にも言つたやうに、靜的な狀態性に對する動的な一面である。此の世界を靜的

と観ずれば、三千大世界も一瞬の今に過ぎない。過去も現在も未來も、豫定されし調和ある状態に過ぎない。しかし翻つて之を動的と観ずれば種々なる時間的なものゝ交響であり、狭蝸なす世界、因果の世界である。前者を世界のアポロ面とすれば後者はそのデイオニソス面である。動詞はかゝる世界のデイオニソス面的表現としての言語記號である。變ずる世界動く世界の言語的顯現として、現象性的屬性觀念の語なのである。現象性こそ稱するものには種々の段階がある。それらの中最も低次的のものは主格未顯的なもの、謂はゞ状態と殆んど變りなき單なる自然的現象である。それは個物の時間性が全く點の如くなれるもの、滅私的なもの沒我的なるものである。機械的的自然とか物理的現象などといふものはその最も模式的なものである。春庭が「おのづから然る」と言つたのはかやうな自然的現象であり、「おのづから然る」動詞はかやうな自然的現象の言語的顯現である。かゝる自然的現象の世界に於ては主格は何等作用するものでなく、其の動き變ずる現象の點的指標に過ぎない。單なる世界の記號に過ぎない。主格があれども眞に働くものとして顯現せるものではなく、只言語記號的に現れてゐるに過ぎないのである。主格が眞に働くものとして顯現する現象は、春庭の所謂「みづから然る」ものでなければならぬ。「みづから然る」とは如何なることであるか。それは主格が發動者として、現象を超えることでなければならぬ。眞に自動的な一郭を劃することではなければならぬ。宇宙時の中に、更に生命時を起すことでなければならぬ。要するに自律的現象といふことである。「みづから然る」動詞性はかゝる自律現象の言語的顯現である。自律的現象とか自動的現象などいふものは、外界を超えてその中に主格的領域を劃するものであるが、未だ環境に内在し絶えず之に支配せられてゐる植物的生命現象に過ぎない。眞に環境を克服せる現象と言ふことは出来ない。「歩く」とか「走

る」とか「飛ぶ」とかと言つても、環境の或地點領域に密着して然してゐるに過ぎない。眞に環境を超えるには、環境と一旦斷絶するといふことがなければならぬ。環境と斷絶するとは如何なることであるか。歩くとか走るとか飛ぶとかといふ動作を幾ら連續してみても、それはどこまでも環境に沿つて、環境に従屬して然すべきものである以上、永久に環境を離れることは出来ぬ。否、「離れる」とか「去る」とかといふことすら環境に依屬せる動作と言はなければならぬ。環境と斷絶する爲には環境より一步退いて、之を對象化するといふことがなければならぬ。環境から離れ之を見る立場に立つことがなければならぬ。それは環境との間に絶對空間といふ如きものを介入せしめることである。然らざれば、幾ら跪いても焦つても環境と斷絶することは到底不可能でなければならぬ。しかし單にかく環境を對象化して之を見、之と斷絶することのみが眞に環境を超える所以ではない。更に反轉して、之に働掛けるといふことがなければならぬ。所謂環境と非連續的となり、而して之に連續するといふことがなければならぬ。「持つ」とか「取る」とか「食ふ」とかといふことをしなければならぬ。即ち何等かの作爲、勞作、製作をしなければならぬ。之が春庭の所謂「ものを然する」ことであり、「ものを然する」動詞性はかゝる作爲的現象の言語的顯現である。しかし單なる作爲は個人主義的現象に過ぎない。作るとかポイエシスとかいふことは歴史的社會的であると言つても、それは歴史的社會的なるべきことを賦課せるに過ぎず、作るとかポイエシスとかいふものそれ自體は、何處までも個人的創意的でなければならぬ。眞にそれが歴史的現實の成素となる爲には、一旦作爲的個人たることを超え、更に汝性を見なければならぬ。主體が眞に客體を見出さなければならぬ。象牙の塔から街頭に出なければならぬ。公人とならなければならぬ。春庭が「他に然する」などと言ふ「他」はかゝる客體である。

「もの」は対象物であるが、「他」は儼然と我に對在する汝である。故に「他に然する」は主體が客體に然々の事を行ふ行動的現象といふことであり、かゝる行動的現象が「他に然する」動詞となつて顯現するのである。我と汝とが對立する公的世界、即ち古くから言はれて來た「世」には民族最高の理性がなければならぬ。しかしてかゝる世に立つ人々は、皆それ／＼に理性人でなければならぬ。單に物を作るホモ・ファールベルでなく、ホモ・サピエンスでなければならぬ。かゝる眞のホモ・サピエンスとしての心の働が、我が國では所謂、大和魂とか大和心とかいふものである。大和心は單なる感情ではなく、高い理性によつて媒介せられてゐなければならぬ。民族最高の精神でなければならぬ。しかしてその中軸を成すものは言ふまでもなく皇室中心の思想でなければならぬ。而も一方かゝる大和魂の内實を形造るものとして、漢才的なものがなければならぬ。ポイエシスとか製作とかといふもの、即ち「ものを然する」作爲現象はかゝる漢才的なものである。しかしそれはどこまでも個人的創意的であり、且インターナショナルである。故にかやうなものに執してゐる以上は、所謂個人主義とか自由主義とかといふものに過ぎない。そこには我欲、我情、我見の世界しかない。此の世は憂き世と觀ぜられるのは、それが爲である。とは言へ、直ちに山野へ隱遁したり、單なる無爲自然を翹望したりすることは眞に之を超克する所以ではない。それは物理的自然への方向、死への方向に外ならない。進んで公の中に立たなければならぬ。自己が眞に公的世界の一分子とならなければならぬ。作爲する自己が、創造的世界の創造的要素とならなければならぬ。物質自然機械的現象に逆轉して行くことでなく、どこまでも社會的自然歷史的自然に深く歸入して行くことでなければならぬ。斯くする道が所謂「他に然する」行動である。人間の生はどこまでもかゝる行動的現象の連續でなければならぬ。

以上「おのづから然る」「みづから然する」「ものを然する」「他に然する」の四は直接的現象であるが、次に「おのづから然せらるゝ」「他に然せらるゝ」「他を然さする」「他に然さする」の四は間接的現象である。間接的現象とは如何なることを言ふか。間接的現象は總て、行動的現象を超えたものでなければならぬ。「他に然する」「行動以上の行動現象である。行動を超えるには二つの方向がある。その一つは「おのづから然せらるゝ」「他に然せらるゝ」の如き自動的方向であり、今一つは「他を然さする」「他に然さする」の如き他動的方向である。しかし前者は被動的現象とも稱せらるべきものであり、後者は使動的現象とも稱せらるべきものである。被動とは如何なることであるか。それは勿論主體の自動的現象であるが、その動きは單に主格の意志によつて行はれるものではなく、主體に對在せる客體の意志のまゝに然せられてゐるものである。故に被動の必須條件として常に主客對立といふことがなければならぬ。しかし「他に然せらるゝ」受身的現象に於てはそれが極めて明示的顯現的であるが、「おのづから然せらるゝ」自然に於てはそれが漠然的潜在的である。前者は社會的歴史的であるが後者は物象的自然的である。前者は眞の主客對立であるが、後者は主體が極小的となり、客體が極大的となつたものである。使動とは如何なるものであるか。使動は被動に反して主體的なるものゝ他動的現象であるが、その實際の動きは主體自身が行ふものでなく、主體は單なる意志者であつて實際の動きは客體によつて行はれるものである。故に使動的現象には常に、意志を實現するものとしての主體と、行動實演者としての客體とが對立してゐなくてはならぬのである。

「他に然する」「行動的現象より他動的方向に超えればそこに使動的現象があり、自動的方向に超えればそこに被動的現象がある。」「他に然する」現象は言ふまでもなく主客對立的であるが、その主格は意志實現者であり、且行

動實演者である。しかしてその客格は單なるその受容者に過ぎない。然るに「他を然さする」現象では主格が只意志實現者となり、その行動實演方を受容者なる客格に譲つてゐるのである。更に「他に然さする」では主格は意志實現者、第二客格はその受授的中繼者、第一客格は行動實演者といつたやうに三權分立してゐる。今度は被動面は如何なる様相を呈するかと言へば、先づ「他に然せらるゝ」受身は大體に於て「他に然する」ものと反對に、主格が單なる受容者であり、客格が意志實現者であり且行動實演者である。只「他を然さする」などの使役から來た形のもの、主格が受容者であり且行動實演者であり、客格が單なる意志實現者である。次に「おのづから然せらるゝ」自然では總て客格的なものゝまゝに行はれていく直觀的事行である。主格は受容者にすらならないのである。

右の如くであるから行動現象以上の觀念性を表示する動詞、即ち「他に然する」「他を然さする」「他に然さする」「他に然せらるゝ」等にあつては常に客格補充素が必須的に關係しなければならぬものである。（「おのづから然せらるゝ」ものでは事實上客體的なものが控へてゐなければならぬが、それは漠然的潜在的なものであるから補充素として記號化することが不可能である。之に反しその主體的なものは極度に記號化されたものである。）しかしてかゝる客格には多く助詞「に」が添加せられる。但し被動に於ては

子が父から財産を譲られる。

子父より財産を譲らる。

の如く、口語では「から」文語では「より」を添へることもある。又使動に於ては嚮にも言つたやうに使役命令の

意ある「をして」「命じて」「言ひつけて」等の補助動詞と言つたものを添へることもある。かやうな客格は目的格（對象格・處置格）と共に動詞性補格として必須的なものである。之がなければ、それ／＼の現象性的屬性觀念を明確に表示することが出来ないものである。（勿論省略といふことは許されるが）故に目的格と客格とが補充素として關係するものは、補充關係の根幹的なものであると言はなければならぬ。しかし、現象性的屬性觀念には之等の外にまだ種々の補充素が關係するのである。

八

動くもの、働くもの爲るもの、行ふものは、單なる動的推移ではない。單に動的なるものといふものは取止めのない浮動に過ぎない。動的なりと考へられるものは、其の裏面に靜的なものゝ對立がなければならぬ。然らざればそれは節度なき動搖、空漠たる動態でしかない。否、その動態といふことも存立し得ないのである。動的なるものは靜的なものに依り、靜的なものに補足せられて成立してゐるのである。かゝる動的なるものゝ靜的補足面が環境であり、それが現象の種々なる意味の補格を形成するのである。

補格の中、目的格とか對象格などゝ稱するものは、作爲性が環境の一部を切り取りその内在的環境と爲せるものである。作爲的現象の内に含まり、その内容となれる特殊な補格である。かやうな目的格より更に進んで、主格に獨立し對立的となつたものが客格である。「ものを然する」の「もの」の中から「者」が、「他に然する」に於て明瞭に分立し、かくて「他を然さする」「他に然さする」「他に然せらるゝ」等が成立して行くのである。「他に」とは

言ふまでもなく客格形式である。しかして目的格はその有意無意を問はざる性質のものであるが、客格は何等かの意味に於て主格と有意的對立をしてゐなければならぬのである。相互が常に行動的でなければならぬ。特に日本語ではかやうな意味が強い。例へば

花が子供に折られる。

本が學生に讀まれた。

などいふ言表が許されないのもその表れに外ならぬ。かゝる主客對立の世界は眞の歴史的世界であり、地上に於ける最高なる現象性である。行動的世界歴史的現實の彼方は、も早天上とか神世とか彼岸とかと言つた宗教の世界である。言語を絶した象徴の世界、不立文字の世界である。

「ものを」の目的格に至らざる補格には種々のものがある。しかしそれらは何れも必須的なものではない。單なる外在的環境の種々相に過ぎない。故に目的格客格の如き一次的補格とも言ふべきものに對し、二次的補格とも考ふべきものである。それらの中、「ものを」の目的格に最も近いものは口語の助詞「で」を添へる性質の補格であらうと思ふ。此の補格は次の如く種々の場合に行はれる。

(一) 時間に關するもの

後でゆつくりお話致しますせう。

今日で丁度十日になる。

(二) 場所に關するもの

東京で賣捌く。

學校で聞いた話。

こゝで澤山です。

(三) 材料に關するもの

牛乳でバタをこしらへる。

木で造つて墨で塗る。

鷹の羽ではいた矢。

(四) 手段方法に關するもの

汽車で行く。 火で焼く。

筆で認める。 水で洗ふ。

(五) 原因理由に關するもの

病氣で死んだ。 役目で働く。

雨で濡れた。 それで落第した。

他人のことで心配する。

しかし之等は何れも目的格の如く内在的環境として對象化されてゐるのではなく、外在的なものとして關與してゐるのである。とは言へそれは單に外在的環境でもない。矢張何等かの意味で内在的なものの一角に觸れてゐる。

るのである。多角形的現象性の何れかの一角を形成するものとして關與してゐるのである。

現象性と環境性とは眞に外在的にして相互に平行的並列的なものは、助詞「と」を添へる補格の場合である。

之には種々のものがあるが、大別すれば補格の並列性が主格的部分に相對する性質のものと述格的部分に相對する性質のものとある。前者は主格の與同者を示すもの、即ち與格などとも稱せられてゐるものである。例へば

君と相談する。 弟と遊ぶ。

山本君と一緒に参りませう。

叔父と花見に行く。

の如きものである。後者には更に二つのものがある。その一つは生成變化等の客觀的現象に於ける歸結を示すものである。例へば

よい日本人と成る。

病氣のもととなる。

赤が白と變る。

赤を白と變へる。

この世を淨土とする。

木石と化す。

甲を乙と一緒にする。(之は與同ではなからう)

の如きものである。次に種々の觀念的活動、思想作用等の主觀的現象に於ける歸結を示すものである。之には様々なものがある。

(一) 名目をいふもの

田中といふ人。これを大化の新政と言ふ。

子供の名を太郎とつけた。

(二) 思念の内容を示すもの

さうだらうと思つた。これにすると決めた。

今歸らうとしてゐるところだ。

よほど苦しいと見える。

どうだらうかと案じてゐる。

(三) 引用語句を示すもの

あつと叫んで倒れた。

知らぬと言つて突撥ねた。

「早く来い向かふは晴れて山がすてきだぞ」と誰かが帽子を振りながら僕等に叫んでゐる。

(四) 譬喩の材料を示すもの

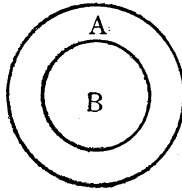
父とあがめる。手足と頼む。

雪とまがふ。花と匂ふ。

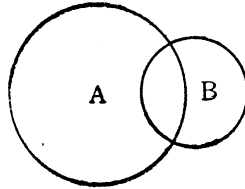
「ものを」の目的格は内在的環境を示し、「で」補格は環境物の外在的關與を示し、「と」補格は外在的並列を示すものであつたが、現象を眞にその中に住せしめる意味の環境を示す補格として助詞「に」を添加する性質のもの

がある。之等相互の關係は略々次の圖式の如くであらう。

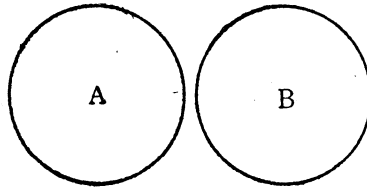
(を)



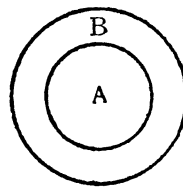
(で)



(と)



(に)



しかして「に」補格には「と」補格の如く主觀的現象に關するものはない。成章の所謂「いつつ」と「と」をみる、ときく、といふ、とおもふ、とする「あゆひ抄・止家」の如きものはない。何れも客觀的現象に關するもののみである。しかしその中には極めて多種多様のものがある。先づ「おのづから然る」などの狀態的な現象觀念に關係するものから眺めて行かう。之には大體次の二つの場合のものがあるのである。

(一) 空間性の狀態的現象觀念に關するもの

(二) 時間性の狀態的現象觀念に關するもの

前者には

水に映る。 地上に落ちる。

人の上に折重なる。

の如く單にその現象の落着せるところを示すものと、

馬に勝る。 猿にも劣る。 父に似る。

の如く、對比的現象なる場合その對比物を示すものとする。後者は

大人になる。 病氣にかゝる。

赤が白に變る。 木石に化す。

の如き生成變化等の歸結を示すものである。次に「みづから然する」などの發動的な現象觀念に關係するものは、「で」補格の範圍に似てゐるが多少の出入がある。即ち略々次の如くである。

(一) 時間に關するもの

八時に目を醒ます。

昭和六年に卒業しました。

三時頃に地震があつた。

(二) 場所に關するもの

机の上に本が在る。 ここに居れ。

第三章 補充關係及びそれに關聯する動詞性

今日は一日うちに居ます。

東京に住む。堤の上に櫻が咲く。

叢に鳴く虫の音 森に啼く小鳥の囀

(三) 歸着地點に關するもの

東京驛に着く。家に歸る。家路に就く。

座布團に坐る。

机の上に本を置く。ポストに手紙を入れる。

(四) 出自對標に關するもの

人に別れる。故郷に離れる。

船に遠ざかる。

(五) 原因理由に關するもの

氣休めに言ふ。それにはさすがの彼も立腹した。その爲に辭職した。

(六) 目的理由に關するもの

戦争に行く。花見に出掛ける。

知らせに來る。研究しに行く。

以上「で」補格「と」補格「に」補格は之を一括して靜的目標とも稱すべきものであるが、次に動的目標とも稱

すべき一連がある。之等は何れも移動性の動作的現象觀念に關係するものである。その中現象性が環境性に最も密接せる性質のものは、助詞「を」を添へる補格である。それは

郷里を去る。

港を出る。 山坂を上る。

川を溯る。

流を下る。 市中を廻る。

廊下を通る。

大空を驅る。 阻路を辿る。

細道を歩く。

門をくぐる。 海を渡る。

池を繞る。

コースを走る。

の如く、移動する地域地點スペースを示すものである。古いものでは

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて戀に死ぬべし。(萬葉・十五ノ三五七八)

愛しけやし家を離れて波の上ゆなづさひ來にて……………(同上・三六九一)

たらちねの母を別れてまこと我旅の假廬に安く寝むかも。(同上・二十ノ四三四六)

あふ坂にて人をわかれける時によめる。(古今・八)

の如きものもある。しかしこの「を」補格は單に空間的なもののみではなく

十時を過ぎる。 四千年を経過する。

三年を経る。 一世紀を溯る。

一千年を下る。

の如く時間的なものもある。又この時間的なものでは

一時間過ぎて 一分間たつて

一世紀溯る

の如く、助詞「を」を添へない場合もあり得る。兎も角、移動する現象に密着しそれと同一な長さ、幅、廣さの環境を指示するものである。しかしこの環境が

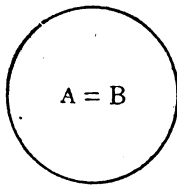
時間を空費する。

流をせき止める。

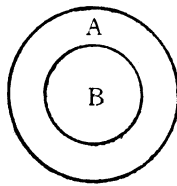
郷里を捨てる。

の如く、作用現象の中に包含されたる場合は目的格となるのである。圖式で表せば

(を補格)



(目的格)



の如くである。

かかる「を」補格的現實環境より將に離脱せんとする現象に於ける補格は、助詞「から」或は「より」等を添加

せる形のものである。即ち動作作用の起る基點を示すものである。かやうな事から、「他に然せらるゝ」受身現象の客格に此の「から」「より」助詞が用ひられることがあるのである。又「より」は狀態的觀念に對しては、その比較對照の基準となる補格を作る爲にも用ひられる。例へば

目元より口元の方が似てゐる。

これよりあれの方が優れてゐる。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ。

の如きものである。但し之は嚮にも述べたやうに、主として形容詞や從屬語等に對して行はれるのである。又別に前後、左右、上下、東西南北等の方向、或は「外」「以外」「以内」「以下」「以上」等限界を示す名詞を以て之を補助することがある。例へば

五時より前に 君より後に

こゝよりちよつと右 五合目より上 關より東

ほんものより外思はれぬ。

三つより外ない。

學問より以外に道樂はない。

君の考へてゐるより以上にこちらでは心配してゐるのだ。
の如きものである。しかして右の中「より外」のものは更に

ほんものより思はれぬ。

三つよりない。

の如く「外」を略し、屬性觀念へ直ちに關係することもあるのである。しかし何と言つて根幹的なものは起點を示す補格である。

起點補格は文語では

去年から山籠して侍るなり。

いわけなく宮の内より生ひ出でて

の如く「から」「より」兩方とも用ひることが出来るのであるが、口語では「から」を用ひるのが普通である。しかしてそれには大體次の二種のものである。

(一) 時間に關するもの

十時から始める。 朝から晩までよく働く。

七月頃から旅行します。

昨夕から寝てゐる。

去年から始めました。

(二) 場所に關するもの

大阪から來た。

母が臺所から呼びました。

ここからは私の分だ。

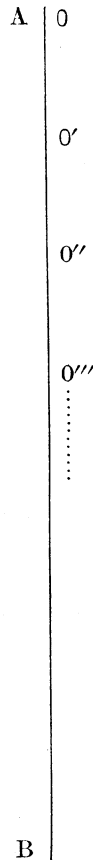
小さな木の茂つた間から小鳥がとんで來ました。

馬から下りる。

私から始めませうか。

樟から樟腦をとる。

かやうな起點の補格は、別の觀點から又二つのものを區別することが出来る。即ち客觀的のものと主觀的のもの、或は眞の起點を示すものと中程的に起る假りの起點を示すものである。例へば今



に於て、A B線を進行の全行程としAを出發B點を到達點とすれば、出發點Aと重なり合ふ觀點0は前者であり、それ以下中間的に假設し得る無數の0' 0'' 0'''等は後者である。かやうな意味から嚮に擧げたやうな眞の客觀的な起點補格を立てることが出来ると同時に、次の如く、主觀的な假りの中程的起點補格をも立てることが出来るのである。

行列がうちの前から通つて行つた。

ちや東郷さんのお邸の脇から抜けて行かう。

あたりよりだにな歩きそ。(竹取)

蘆荷ひたる男のかたゐのやうなる姿なるこの車の前よりいきたり。(大和)

いといかめしうして此としかげの家^のまへより詣で給ふ。(宇津保・俊蔭)

以上の如き「から」「より」の外に古代では「ゆ」「ゆり」「よ」の如き助詞も用ひられてゐた。例へば

月よみの光を清み神島のいそみの浦ゆ船出すわれは。(萬葉・十五ノ三五九九)

畏きや命かゞふり明日ゆりやかえがむた寝むいむ無しにして。(同上・二十ノ四三二二)

大夫の清きその名を古よ今の現に流さへる……………(同上・十八ノ四〇九四)

ほとゝぎす厭ふ時なし菖蒲草壁にきむ日此ゆ鳴き渡れ。(同上・十八ノ四〇三五)

の如きものである。

起點を示す補格とは如何なるものであるか。起點といふことは終點と常に相對的である。起點を示す補格は、終點となるもの到達點となるものを常に豫想する意味のものでなければならぬ。「を」補格の如く單なる地點領域を示すものは、現象に對して絶對的環境となるものであるが、「から」「より」補格の如く起點的なもの發足點的なものは現象に對し絶對的に關係するものでなく、終點面を豫想せる相對的關係をなすのである。かやうな「から」「より」補格に相對する意味のものが靜的目標を示すもの、取分け「に」補格である。「に」補格は前述の如く種々の意味で關係するものであるが、その中歸着點到達點を示すものとして、「から」「より」補格に對立的であると言へるのである。斯くて此の相對的な兩者の形態が、それ／＼客格に於ても行はれてゐるのである。かゝる兩端の

略々中間に位すべきものとして、助詞「へ」を添へる性質のものがある。例へば

大阪へ行く。 筑紫へ遣す。

近くへ引越す。 東へ向かふ。

右へ廻る。 前へ進め。

家へ急ぐ。 向岸へ渡る。

南へ南へと進む。 こちらへ来る。

谷底へ落ちる。 天上へ昇る。

下へ隠れる。 私所へお届け下さい。

の如きものである。之は言ふまでもなく移動の方向を示すものであるが、已に起點を發出し、而も未だその終點に到達せざる意味のものである。とは言へそれは勿論到達點に傾き歸着を庶幾してゐるものでなければならぬ。「を」補格は現實的環境を示し、動作作用は只管それに執着してゐるのであるが、此の「へ」補格は未來的環境を示し、動作作用の現實を餘り問題にしないものである。

九

補充關係といふものは言語の觀念的構造の一方式群であるが、それは單にそれだけのものではなく、其の言語が最もよく實在の問題に接觸してゐる部面であると思ふ。その言語の偽らざる實在解析の具體的業績であると思ふ。

殊に主體的なものの種々の在り方と、環境との補足關係を率直に表現してゐる。私はかやうな意味に於て補充關係は單に文法學上の問題のみとしてではなく、形而上學的問題として取扱つても充分に價值ある成果を擧げ得るのではなからうかと思ふ。(然し私は此處でさやうな哲學的論究をして居るのでは勿論ない。)

兎も角實在を靜的側面から見れば環境的であるが、動的側面から見れば主體的である。その主體的なるものの在り方は更に靜的な狀態性なるか、動的な現象性なるかである。靜的な狀態性の在り方に於ては、比較比定の對標といつたものの外に、さまで環境的補足の必要もないのであるが、動的な現象性の在り方に於ては多様な環境的補足が必要である。そこに補充關係や補格の問題が最も活潑に論じられなければならぬ。しかし、それらの間にも必須的なものと時にとつて必要とするものがある。本質的なものの第一義的なものと、偶有的なもの第二義的なものがある。本居春庭が詞の通路に於て究明した詞の自他問題は、實にその前者に就いてであつた。補充關係や補格の問題は、かゝる通路的研究を根幹として展開して行かなければならぬ。

しかし通路に於ける研究目的は動詞の觀念性的範疇であつた。第一義的な補充關係を通して、それと密接な關係にある動詞の觀念性を認識することであつた。私は嚮にイエス・ペルセンなどの故智に習つて、修飾關係の認識と共に觀念語一般の範疇を試みてみたが、それは現象性的屬性の陳述語である動詞に對し遂に如何ともすることが出来なかつた。しかし春庭の爲した如く、補充關係と平行的にやつて行けば動詞に對する範疇づけも比較的容易に爲し得るのでないかと思ふ。

動詞は之を「然る」動詞と「然する」動詞とに大別することが出来る。「然る」動詞といふのは狀態的現象とも

いふべき、殆んど形容詞や狀態的從屬語などと大差なき觀念構造を有するものである。随つてその主體的なるものには何等發動力なく、只無意的に環境の中で然現象してゐるのみである。最も環境的な現象性である。所謂「おのづから然る」現象である。故に之に對し環境的補足をする必要は餘りなく、動詞中補格繋合の最も少きものである。之に反して「然する」動詞は有意的である。主格に何等かの發動性あるものである。生命的活動的動作である。しかしそれらの中、單に「みづから然る」ものは眞に補格を必須條件とするものではない。勿論時にとつて種々の環境的補足を必要とするものであるが、それはその現象性の内實にまで喰入つてゐる如きものではない。「然する」動詞が眞に補格を必須條件とせる形が「ものを然する」である。即ち發動的なるものの中に對象物が分立し、之を目的とする作爲勞作の觀念を表示する動詞である。「ものは」言ふまでもなく必須條件的な目的格的補格を意味する。「ものを然する」動詞性から、此の「もの」の補充する意味を眞に引去ればそれは「みづから然する」自動に過ぎない。「みづから然する」自動に對する他動一般の觀念構造は、常に「ものを然する」形でなければならぬ。しかし「ものを然する」の「もの」には「物」の場合と「者」の場合とある。無意的なる場合と有意的なる場合とある。「乳を飲む」も「母を慕ふ」も「ものを然する」である。かやうな「もの」から「者」が分立し主體的なるものに對立する客體的なものとなつたものが、「他に然する」である。故に「他に然する」は場合によつて「他に（物を）然する」と考へてもよい。しかし「他に然する」ものに於ては「他に」といふこと、對客者的であるといふこと、社會的歴史的事であるといふことが最高次の要件であるから只さやうに言つたまでである。行動的動詞としての特色を端的に標示しようとしたまでである。しかしその内實として「物を」といふことがあることを忘れて

はならない。「他に然する」の「他」は客格であり「然する」は「物を然する」である。

現象には殆んど状態と何等變りなき程のものから、存在、活動、動作、作爲、製作、行動等種々の段階次元があるが、それらの中社會的現象或は歴史的自然としての行動現象は最高次の現象でなければならぬ。随つてかゝる行動現象には、「他に然する」ものの如き單純にして直接的なるものの外に、それが開發・延展して種々雜多なものに分れて行くのである。それらの中で助動詞接合の文法的構成を必要とするものは、常に複雜となれるばかりではなく、間接的現象とも言ふべきものとなり、前述の直接的なものに對し特異な領域をなしてゐるのである。それは行動的なるものの非行動的なるものへの轉身とも言ふべき形貌を呈するものである。とは言へ何處までも複合的分節的行動への方向として考へて行かねばならぬ。かやうなものには「然せらるゝ」と「然さする」ものとがある。即ち被の方向と使の方向とである。被の方向に於ける模式的な分野は「他に然せらるゝ」受身であるが、更に極端に進んだ意味のものとして「おのづから然せらるゝ」自然がある。前者は受動的ではあるが、未だその行動的色彩の濃厚なるものである。しかし後者は全然それを失ひ、環境的方向に平められ將に「おのづから然る」に逆轉せんとしてゐるかの如くである。故に前者では主格が有意的にして客格は顯現してゐるが、後者では主格は無意的にして客格は潜在してゐる。使の方向も「他を然さする」「他に然さする」の二に區別して考へた方がよいのであるが、この兩者の相違は被動に於ける受身と自然との相違程甚しくない。何れも單複間接度の別があるが、使役的である點に於て變りはないのである。しかし「他に然さする」の如きものを次第に進めて行けば遂に主體の意志力が平淡となり、その極、無意味に陥つてしまふ。

右の中「ものを然する」以上のものは總て目的格的補充を必要とするものであり、「他に然する」以上のものは總て客格的補充を必要とするものである。しかして目的格客格以外の難多な補格は、一般に何れにも關係し得るのである。勿論そこには「を」補格は如何なるものに、「に」補格は如何なるものにと云つた種々の特殊關係を考へることも出来るのであるが、それは多くの場合交錯的で餘りにも煩雜であり、且被補充素の觀念的性格と本質的に呼應するものではない。故に目的格客格等の第一義的補格に對し、爾餘の補格は第二義的副次的なるものと考へなければならぬ。さらばと言つて之等雜補格を修飾格と同一に考へてはならぬ。補格修飾格は共に從屬格とも稱せらるべきものであらうが、そこに外附内屬の相違があるのである。前者は環境的なものが主體的なものに未だ對立的なる關係であるが、後者は環境的なものが解體し概念化し主體的なものの部分となれる意味の關係である。故に補充素は被補充素の外に自存し、どこまでも觀念の實體性を保持するものであるが、修飾素は被修飾素に内含しその觀念性の底の底まで盡くさなければならぬ。しかし又一方補格は主格の如く後行素に眞に對立してゐるものでもない。即ち統合關係をなすものではない。一旦は外的に對在するものであるが、それはどこまでもその對立を固執するものではなく究極的には從屬して行くものでなければならぬ。個別的主従、主從的個別と言つた如きものでなければならぬ。補充關係と統合關係とは混同さるべき性質のものではない。日本語では西洋諸語の如く、主述の間に特殊的な制約形態が成立してゐない爲、ともすれば主格を補格と同位的に考へられることがあるのであるが、單にそれを混同してはならぬ。主格も補格と同様なものであるなどと考へてはならぬ。それは形態論的行過といふのである。